
贈る唄

うみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

贈る唄

【著者名】

N1129E

【作者略名】 うみ

【あらすじ】

9割は、私が体験してきた、実話です。

—これは、
私の初めての恋の物語—

憧れの高校に入学できた、春の事だった。

私は、ゆみ。

今日は、制服が可愛い高校で、そして姉が卒業した高校で、すんなりと推薦合格し迎えた入学式。

まだ中学生の気分が抜けていない私を、新しい制服が高校生へと変えていた。

長つたらしい入学式も終わり、体育館に張り出されたクラス分けの名簿に一つ一つ目を通し、名前を探す。

一年五組。

あつた！！

中学からの友達が少ないクラスで、多少不安はあったけど、私の楽しみは、何と言つても、中学から決めていた部活だった。

体育館を出て、教室に向かつ途中――・・・

沢山の部活の勧誘で、道はじつた返し、様々なゴーフォームの色、色・・・。

私は、この高校で歴史あるところ、あの有名な部活の団体を田で追う。

私が

唯一、中学から入りたがっていたのは、空手だった。

なぜって、中学の時の何かの講演会での警察官を見た時から、かつ
こいー！と一目惚れしたから。

あんな、かつこいー人になりたい！！

それなら、格闘技！

と勝手に考え、悩んだ挙げ句の空手だった。

勧誘してくれる先輩は、いないかな。

期待しながら、教室へと向かう。

でも、勧誘されなかつた・・・。

だよな～・・・。

その日の格好は、部活をやつれつな格好じゃなかつた・・・。

ミニスカに、ルーズソックス、ローファー。。

だよなあ。

私が勧誘だつたら、話かけないもんなあ・・・。

いいや！！

それなら、自分から行くべし！

私は、全ての日程が終わった、夕方、空手の道場へと向かった。

「アイツ、アイツ、アイツ！！」

道場に近付くたびに大きくなる、活気の声。

沢山の人たちが練習に、真剣だった。

それに圧倒されながらも、私の中に燃えているモノは変わらない！

勢いよく、道場のドアを開ける。

一瞬、みんなの動きが止まる。

冷や汗する私。

「失礼します！」

今日、入学した、一年のゆめです！入部したくてきました！」

はつきりと聞こえるように、そして大きな声で言った。

近くにあつた椅子に座つて、見学するように言われ、言われるままに部活の風景を目に焼き付ける。

全国出場を伝統としている分、

物凄い練習内容だったけど、とっても惹かれるものがあったんだ。

練習を見学して終わった頃、私のやりたい…と書いた紙持ちは、益々盛り上がっていた。

「明日から
参加させて下せー!」

そういつて、練習時間を聞き、道場を後にした。次の日から、学校が終わると、真っ直ぐに向かうは道場。

まだ、
道着がない一年生は、
新しい体育着に、先輩達が来る前には、何かと準備をやつておかなければならなかつた。

下つ端と言つ事もあつて、掃除などやらせる事もあかつた。

一年生の頃は、特に何も大きい変化はなく、ただ、毎日が、慌ただしく過ぎていったような気がする。

でも、その慌ただしい中に、一番面白くて、ムードメーカー的な先輩がいて、いつしか、その人の事を目で追っている私がいた。

その先輩の名前は、

優先輩。

優先輩の最初の印象は、歓迎会で

広い先輩宅に部員全員、泊まつた夜、

テンションが最も高かつた人で、とっても面白くて、この人、お笑い芸人になれる！という印象だった。

それから、この人と、話してみたい！って思つたんだつけ。

部活で、休憩の時に水を渡したりして、

ちょくちゅく絡んでたつけ。

それから、

みんなよりは大分

遅かつたけど、私が携帯持つよになつて。

何となく、

女の子に壁を作っていた優先輩には、
アドレスを聞けなくて、優先輩と一番の仲良しだったカズ先輩に、
優先輩の事、色々きいちゃお～！！

と言つこんたんで、

カズ先輩のアドレスを聞いた。

その夜、早速、

私は、カズ先輩にメールする。

「今日も、練習お疲れ様です！」

送信。

5分後・・・。

メール受信。

「だれ？」ん？

「今日、アドレス交換した一年のゆみです！
カズ先輩、登録してて下さいよ～！」

と、送信。

またまた、受信。

「俺、優だけぢ・・・。」

そのメールを見て、
凍りつく私・・・。

ビリビリ…！

取りあえず、
速攻で、
「すいません！
間違えました！」
と返信した。

怖い。・・・ビリビリ…！

ただでさえ、

優先輩と話しないのに！

次の日、道場に行くと

カズ先輩が、優先輩に怒られていた。

「お前、勝手に、人のアドレス教えんな！」

でも、カズ先輩のお陰で強引だつたけど

私は優先輩に、

「お疲れ様です」のメールを送る事ができるようになつたんだ。

相変わらず、

優先輩の反応は

素っ気なかつたけど

返してくれてた事に嬉しかつた。

そして、それと同時に、部活では、あんまり話さなかつたけど、優先輩に少しずつ惹かれていく私がいた。

高校生になつて初めてのクリスマスが來た。

でも、勿論、
その日も練習。

寒いのに

外を走る事になっていた。

嫌々、走る。

風は冷たいし、寒いし、鼻は痛い！！

最悪ーツ！！

そんな気持ちで
走っていた。

すると、後ろから
肩を叩かれた。

「はい？」

振り向くと

そこには優先輩。

うわ～ッ！！

何何！？

テンパついたら、
優先輩が、

「ゆみさあ、
明日、誕生日って言つてたよねー、何かあげてやるから期待してて
な！」

そう言つて、私を追い越して走つて行つてしまつた。

はい！？

何ですか！？

何！？

この気持ち！？

この展開！！

期待しておこッ！！

ワクワクして夜は
眠れなかつた。

もしかして・・・

優先輩・・・

両想いーイ！？

妄想だけが
膨らむ夜だつた。

次の日、

ワクワクドキドキしながら、道場へと向かう。

練習中も、

いつ貰えるのかな〜。

みんなの前で渡されたりしたら失神だよな〜。

そう考えてばっかりで

練習に身が入らなかつた。

練習も終わつて、
期待が膨らむ私。

そして、

帰る準備を始める優先輩。

ええッ！？

そのまま、
帰ってしまうんですか、あなた！！

ちょっと！
ちょっとちょっと！

平然と帰り始める、
優先輩。

めちゃめちゃ

妄想していた私にも

腹が立つたが

そうさせた、優先輩に

非常に

ムカついたので、

「優先輩

何かお忘れではないでしょうか?」

と私は笑顔で、

帰ろうとする優先輩を
引き止める。

一瞬、?マークを出す。

忘れてたのかよッ！

そして、いかにも
今、思い出したかのよひこ、

「あつ！

ゆみの誕生日だよね！
ちょっと待つて！」

と何やう、

カバンの中をガサガサし出す。もううっしー。
忘れてなかつたじやない！

忘れたフリしてたんだね！

と
ニヤける私。

「はー！
手出してー！」

緊張しながら、
手を出す私。

「はーーー・プレゼントーーー」

飛び上がる程、嬉しかった私は、笑顔で手のひらを見る。

そこにあつたのは、

・・・フルーツのビタミン。

・・・
一粒。

WHY!?

「じゃあねー」

そう言って、手を振り帰つて行く
優先輩。

呆気に取られ、1人佇む私。

はい、期待してた
オバカさん

だよね～！

付き合つてもないのに
わざわざ、プレゼントなんて買わないわな～・・・！

でも、もうその頃には、
優先輩を目で追わない日はない！と言つ位、
好きな気持ちは高まつていた。そして、
あの貰つた一粒のあめ玉も勿体なくて食べられなかつた。

それから、稽古納めと言つ事で、道場の掃除があつた。

その年、最後の部活だった。

優先輩は、窓を拭いている。

実は昨日、

いつも恋愛相談する友達のミカと2人で
優先輩に、何かあげたくて、そしてこの気持ちに気付いて欲しくて、

学校帰りにメンズショップに行つて、優先輩に似合いそうな一ツ
帽を選びに行つた。

優先輩に

似合いそうな帽子ー・・・！

彼女になつた気分で選んでいた。

やつと選んだ帽子を
店員さんに丁寧に包んでもらつ。

またまた、ワクワクして眠れなかつた夜だつた。

そして今、

それを渡すタイミングを私は探していた。

何つて言おう!?

考へてゐる内に、タイミングはやつてきた。

「いつも相談にのつてもらつてますから、あげますー」つて意味の
分からぬ理由で、ニット帽を渡す。

驚く、優先輩。

・・・走つて逃げる私。

その頃、親と喧嘩して、携帯を取り上げられてた為、長い間、優先輩とはメールしていなかつた時だつた。

そして、あれよあれよと大晦日になり、仲良くなつた部活の友達にカウントダウンをやろうよー!って誘われて、海に行つた。

すると、そこに
見覚えのある人がいた。

何でいるの！？

それは、優先輩だった。

友達が、私の気持ちに気付いていたらしく、
気を利かせたのか分からぬけど、

このカウントダウンに、優先輩とカズ先輩も呼んでいた。

恥ずかしかつたけど、
嬉しかった。そして、優先輩を

よく見ると、私があげた帽子を着けていた。

思えば私、帽子をあげた日から優先輩に会つていなかつた。

あの日から、久々に見たんだなあ。

そう考えている内に、

カウントダウンは始まつた。

3、2、1。

あけましておめでとうー。

海の上の船の船笛と共に、年が明けた。

周りが、この嬉しさに騒ぎ始めた。

そして、その空氣に

のまれてみんな、テンションが高くなる。

ふと、優先輩を見る。

ええッ！？

何やつてんですか、
お兄さん！！

優先輩は、どこから持つて来たのか、カズ先輩とお酒を呑んでいて
酔つ払つていた。

そして、フランフランと1人でどこか行ってしまった。

大丈夫かなあ。。

心配だけど、追う事ができない私。多分、不安な表情してたんだと思う。

そばにいた友達が、

「ゆみ、優先輩、酔っ払ってるから、一人で歩かせたら危ないよ、
見てきて。」後押ししてくれた。

急いで、後を追う私。

見つけた。

優先輩は、海が見渡せるブロック塀にポツンと座っていた。

恐る恐る声をかけてみる。

「あの～・・・。

優先輩、大丈夫ですか？」

優先輩、振り向く。

「ゆみ?

こっちに座りなよ。」

怖いよー。。

緊張しながら、

微妙に30cm

あけて隣に並んで座る。

何も話せない位に固まっていた私。

すると、優先輩が、「寒いねー。」って言いながら、私の手を取つて、さすり始めた。

うわー！

何でいつの間に隣にいるの！

そして、この衝撃的な行動で、緊張感はピークに達していた私は、それからの記憶が、今でも全く思い出せない。

でも、一つだけ言つなら、これで、もう後戻りも出来ない位、優先輩にハマっていた。

そして、学校が始まり、一緒に行動していた同じクラスのサキに重
大発表をした。

優先輩に告白するーつて。

サキは、恋愛の話が大好きで、サキが話す事の、殆どが、
誰々がカツ「コイイー！」そういう事ばっかりだった。そんなサキは、
私が恋をした事に興味津々で、
やつと、ゆみが恋をした！と喜んでくれた。

でもね、それが、今思えば、厄介な事だつたんだよね。

私、サキが、おしゃべり魔だとは知らなかつたんだ。

サキは、サキの同じ部活の先輩に、

「先輩、優先輩つて、同級生ですよね~、
あの先輩の事、私の友達が好きで告白するらしいんですよ~、
しかも、優先輩、かつこいいんですよ~、私、見ましたから。
先輩、知つてますか?」って言つたもんだから、

サキが話した、
その先輩は、
周りじや有名の、

恋多き女と呼ばれていて、

なんと、優先輩を探し出して一目惚れをし始めた。

そして、得意の猛烈なアピールを開始。

もつ、私が入る隙間もない程に凄かつた。

その先輩は、自身の部活が終わっては、道場に来て
優先輩にやたらと話かけに来た。

同級生だから、敬語も使わない。
だから、普通に会話してて見てて羨ましく思った。

優先輩から、お返しにもらつたのは、芸人っぽいセンスを生かした

そして、やつて來た
ホワイトデー。

あの先輩に比べたら
私は、蟻んこだった。

もちろん、負けじと
私もあげた。

遠征に行って來ては、

「お土産だよ！」って渡していく
バレンタインには、
「優が、呼び出されたらしこよー...」
と男子の先輩が噂していた。

のか、何か得体のしれない仮面。。

やつぱり、恋愛対象じゃないんだな、

もう、ダメだ。。

私の恋は終わった。

そして

ライバルが強すぎた。。

そう感じたものの、
このつやむを晴らすと、当たって砕ける精神で、告白を決意した。

それは、

私が一年生に進級し、

彼がインターハイを控えた頃だった。

もう、優先輩は引退してしまったんだよな、
見れなくなつてしまふんだよな、
寂しさ、切なさが、どんどん強くなつていく。

そして、4月7日、
告白を決行した。

優先輩に、

「お話ししたい事があります」と電話で言つ。

するべく

今、どういったところ?

俺、そこ向かうまいー

場所を告げる。

30分後、校則で禁止されているバイクに乗り、優先輩はやってきた。

心臓がバクバクし始める！！

そういうえば、告白の言葉、考えてないッ！－！

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

と話を切り出した。

「……………」

「どうしたの？」ここで、最後の勇気を振り絞る。

「あのッ！」

優先輩が、好きなんです！」

・
・
・。

優先輩、
ポカーンつして
る。
。

•
•
•
◦

そして、

シーン。。

何分か過ぎた。

この空氣に
耐えられなくなり、
私が口を開いた。

「あの～。
すいません。。なんというか、
返事だけでも聞かせてもらつても良いですか？」

すると、優先輩は、

「ちょっと待つて。
時間が欲しい。」

予想もしていなかつた

展開に、

私、

へつ？！

時間？！

WHY？

すぐ出る答えつしょ？

良いか、ダメかの2つに一つだよ？

ダメなら、今、言つてよ～！

頭は、訳が分からず、チンパンカンパン。

でも、

時間をあげる事しか、あの時は出来なかつた。

なんだかなあ～・・・。

そして、
あの衝撃的な告白をした日から1ヶ月が経とうとしていた。

普通、

こんなに待たされるもんなの、^{井口}の返事つて。

もへ

時間も経ち過ぎていて、「これは、自然消滅だなー」いやむやだけど、
忘れなきやいけないんだ！
と、葛藤する毎日だった。

そんな時、
あのサキがやってきた。

やつぱり、あの先輩か。

・・・そうだったんだ。

・・・。

「ねえねえ！
聞いた？！
私の先輩が、優先輩に告白したらしく～！」

同級生の方が良いよね。話も合つだらう。

私の恋愛、終了ーーー！

お疲れ様でした。今日も氣まずいけど、
部活は部活で割り切らなきゃ！

気持ちを切り替え、
そして、道場へと向かつた。

あれから、なるべく、優先輩を見ないようにしていた。

意識しないよつこ、練習に取り組む。

そして、

いつも通りのハードな練習も終わり、最後の柔軟体操をしている時だった。

突然、隣にいた友達が、

「ゆみー、今日、部活終わったらさ、優先輩が道場で待つて欲しいんだって。」

ん?
何で?

もつ振られたも同然だし、理解できてるからいいよ・・・。

こんなに待たせてた事を直接言つて謝るつもり?

これ以上、傷つきたくないかった。

それでも、友達が一緒に近くまで付いていってあげるからー」と、

重い足どりのまま、
制服に着替え、

みんなが帰った暗い道場に向かった。

優先輩は、もう
そこにいた。

「い」みんな、呼び出して。

「・・・はー。」

「聞きたい事があつて。自分から言つていいんだけど、
あのせ、まだ、俺の事、好きかな？」

「・・・」

何が言いたいんだろう。

私、今、頑張つて

あなたの事、忘れようとしているの。

「あの～・・・。

私、1ヶ月待つてたんですよ。

普通、付き合ひうなら、付き合ひうで、すぐ返事つてくれますよね。

私、

優先輩に無理して、

好きになつて欲しくなかつたから、返事、早く欲しかつたんです。
あの、大晦日に、

手をさすつてくれた事だつて、私があげた帽子を付けてくれてた事
だつて、もしかしたら、両想いなのかな、つて期待してたんです。
勘違いしてたんですよ！優先輩に告白してから、すぐに返事が貰え
なくて、私、

もしかしたら取り返しのつかない事してしまつたのかな、優先輩を
忘れないやつて、悩んでたんです。

それに、あの女の先輩に告白されたんですよね。聞きましたよ。」

私は、もうヤケになつていた。

だつて、どんな想いで
この1ヶ月を待つてたかつて、
言わなければ良かつた・・・。
つて後悔が押し寄せる毎日だつたから。

すると、優先輩は、

「本当にごめん。あの人の告白なら断つてる。
ゆみが、まだ、俺の事、想ってくれてるなら、付き合いたい。」

え？

私？

ポカーン。。

何?

私と、付き合いつ?

はいイイゞ!?

考えてもいなかつた
シチュエーションにびっくりして、状況が読めてなかつた。

でも
嬉しかった。

けど、待って。
確かめたい事、あった。「じゃ、何で、1ヶ月も待たせたんですか？」

「それは、
俺、ぶっちゃけ、クリスマスの時から気になつてたんだけど、前の
彼女の事とかあって、人を信じたくない！もう、恋したくない！つ
て思つてたからさ、傷つきたくなかったんだよ。

だから、自分の中、整理するのに時間がかかった。

あと、本当、

1ヶ月も待たすつもりはなかつたんだけど、
あまりにも、ゆみが、俺を避けるもんだから、嫌われたと思って、

話かけられなくて。」

優先輩の気持ち、
聞きながら、
安心した。

そして、

私を選んでくれて、ありがとうございます、そつ細つたんだ。

私達は、
告白した日から
ちょうど1ヶ月後の
5月7日、付き合った。

そして、

あっという間に

インターハイがやってきて、優先輩が引退する最後の日になつた。

試合が終わって、学校に戻つて打ち上げをし、解散となつた。

「最後の部活だから、

一緒に帰ろう!」

そう言われて、

誰かに見られないようにソロソロ一緒に帰つた。

一緒に歩いてる時、
もう一度やつれて帰る事もないんだね、と淋しそうに駆られ、
ボロと涙が出た。

「いやつて、思い出になつていいく事が、私は怖かった。

優先輩に、

そんな気持ちが悟られたのか、

「大丈夫だからー」と何度も慰められた。

そして、どこかに座つて落ち着く。「…となり、

学校の裏門の階段に腰掛けた。

今思つたら、
大袈裟に感じるけど、あの時、優先輩しかいないと感情が突っ走
つて、恥ずかしかったけど、言った。

「優先輩、

私のファーストキスになつて下さい。」

夜の静かな学校で、

私は初めてのキスをした。

それは、付き合って1ヶ月経つた初夏の頃だった。

優先輩が

引退してからと言うものの、大学を受験する優先輩、選手となつた
私、お互い、忙しい日々が続いた。

そして、あっという間に1-2月がやつてきた。

クリスマス。

優先輩は、バツチリ休みを取ってくれていた。

そして、部活が終わって久々にデーターする。

優先輩は、サプライズプレゼントを本当によくやる人だった。

いきなり、ギターが登場した時にはビックリしたけど、この日のために練習したんだ！って、

クリスマスと一緒に誕生日の私に
バースデーソングを披露してくれた。

ー お金もない、
時間もないけれど、
今日は君がこの世に
生まれた日だから
今の僕にできる
たった一つの贈り物。君の心にこの歌が
届きますように

優しい笑顔曇らぬよつここの歌を贈りますー

そして、お揃いの
シルバーのアクセサリーをプレゼントしてくれた。

私、幸せ者だな、って実感してたんだ。

優先輩からもらつた

アクセサリー、お風呂も寝る時も、外さなかつたんだよ。

そして、また時間は過ぎていき、今年も終わろうと大晦日の日はやつてきた。

優先輩は人手が足りないとバイトが入つていて、

私は、いつもの部員メンバーと、去年の場所へ再び行つた。

もう大晦日だなんて、
月日というのは、
恐ろしい程早かつた。

そして、カウントダウンも10分前と迫つて来た頃だった。

携帯が鳴る。

優先輩からだつた。

「今、バイト終わったよー。ゆみ、今どこにいる？」

「去年と同じ海だよ。」

「わかった！
今から行くから。」

へえ！？

驚きを隠せなかつたけど、友達に、

今から優先輩が来るらしいから、ちょっと抜けるね！
と言い、去年、優先輩と座つたブロック塀に一人向かう。

一人で座つて黄昏ていると、再び携帯が鳴る。

「さあ、ここへ来て少しでもつくら」

「去年、一人で座つてた所にいるよ。」

電話を切り終えた時には、

23・59となっていた。

「つや、間に合わないだろうな。

今年も、終わる。

周りでは、カウントダウンを始める人達も出始めた。

3、
2、
1。

去年と同じように

船笛が鳴り響く。

「……みツーー！」

後ろから声が聞こえた。

振り向くと、
すごい速さで優先輩が
走つて来た。

「優先輩！！」

笑顔になる私。

そして、次の瞬間、

私は、腕を引つ張られ、気がついた時にはキスされていた。

今年最初のキス。

ドラマみたいで

恥ずかしかったけど、思い出に残る年明けだった。

付き合ひ、つて楽しい！

本当に、青春、つて感じがした。

優先輩は、本当に
優しくて、かつこよくて、最高の彼氏だった。

そして、

お互いが休みの日には、よく、海へ行つた。

優先輩は、

1人でも行く位、海が大好きだった。

あの海の広さが

心を落ち着かせてくれる、って。

それから、私も海が好きになつて、晴れた時でも雨の日でも、よく連れて行つてもらつた。

隣には、優先輩がいてー。

それが、当たり前になつてきていた。

でも、時間つて、
止まらない。

いじわるだと思ひ。

もひ、田付は3円に差しかかっていた。

3月1日は、
優先輩の卒業式。

その日が来て欲しくなかつた。

前日に、

「最後の制服、デートしよー！」

と、お誘いがあり、

私の部活が終わるまで

図書館で待っていてくれた優先輩と帰つた。

記念に！

と、プリクラも撮つた。

なんだか、
離れたくない
夜遅くまで、

私の家の近くの公園で
お喋りしてたね。

家に帰つて、

とっても叱られたっけ。でも、全然怖くなかった。

恋のパワーって

恐ろしいねー！そう思つてたんだ。

次の日、

（

携帯の着信音）

起じられた。

「～・・・もしも～し・・・。」

「ゆみ?
「めん一起じしてしまつたか!-?」

声の主は
優先輩だった。

「ううん～…
大丈夫だよ…
どうしたの～…?」

寝ぼけまなこな私。

「あ～…

今日、俺、卒業式だから、これで学校が最後だと思うと寂しくなつて。。。だから、随分と早いんだけど、実はもう、学校に向かってるんだー！」

「ええー!?」

時計を見ると、
まだ7時前……。

それにして
早過ぎでしょ！？

そう思いながらも、

「そうだよね～！」

寂しいよね！

よしつ！今から私も行くから待つててね！」そつと言つて、電話を切つた。

ダッシュで準備して、
7時半には、学校に着いた。

でも、優先輩の姿は
なかつた。

あれ！？

おかしいなあ、つと
携帯に電話する。

—おかげになつた電話は電波が・・・

えー？？

何それ！！

一時間経つても、優先輩は現れなかつた。

もうつ！！

カメラも、写真沢山撮らうつて、用意してきたのに〜！！

不機嫌になりつつある私に、携帯は鳴る。

カズ先輩からだつた。

「もしもーし。」

「ゆみかっ！？」

優が、朝、車に引かれて、病院に運ばれたらしい！今、優の兄貴から電話が来た。

ゆみ、早く優の所にいけ！！」

言われた事は、

そんな感じだったと思う。何を喋ってるのか分からなかつた。

一緒に、

優先輩を待っていた友達とタクシーに乗つて、教えてもらつた病院についた。

受付で、名前を言って

場所を教えてもらひつ。

なんだか、
嫌な感じがした。

重い足取りで、
部屋につく。

扉を開けると、
優先輩の寝顔があつた。

そして、そばには、

初めて見る、優先輩に

雰囲気が良く似た人が三人立っていた。

優先輩の

お母さんらしき人が、目を真っ赤にして
優先輩を見ていた。

私は、状況が掴めなかつた。

立ち尽くしていると、

「・・・ゆみちゃん?」と声をかけられた。

「あ、はい・・・」

今、そこへ戻れるの?.

え?
?

「・・・優、
トラックに引かれて、即死だつたんだ・・・。」

友達が
そばで泣き始めた。

信じられなくて、
私は涙も出なかつた。

後から、

沢山の親戚の人達が来て、私たちは、病院から出るしかなかつた。

嘘だと思っていたくて、
メールを問い合わせしてみた。

0件。

それでも、実感はなかつた。

家に帰つて、

優先輩から電話が来るのを、ずっと待つていた。

でも、

いつの間にか、眠つてしまつていた。

次の日、

カズ先輩から、

優先輩の葬式の詳細が

送られてきた。

部活生、みんなが参列する事になつていた。

みんな、私を気遣っていた。

写真に写ってた優先輩は、卒業アルバム用として学校で撮った個人写真だった。

はにかんだ笑顔で
こっちを見ている。

優先輩
・
・
・

頭の中は
空っぽだった。

放心状態つて、
この事を言つんだと思つた。

「・・・ゆみひやんー」

帰らうとした私を、
優先輩のお母さんが呼び止めた。

「これ、優の制服のポケットに入つてたらしくて、ゆみ、つて書いてあるから、渡しておくな。
今日は、ありがとう。」

と、ちよつと血痕が付いた、折り畳まれた白い紙切れを渡された。

開いてみる。

それは、一枚にビックシリ書かれた手紙だった。

「ゆみく。

おはよう。突然の手紙で
びっくりしたと思つけど、俺、今日、卒業するから、この手紙が最
後になるとと思つて。

ゆみと出会えて、本当に良かったって思う。

学校生活が、とっても楽しかった。

ゆみと付き合つてからの事、一つ一つ、思い出してしまう。

俺が落ち込んでたら、元気になれるよ、つて
レモンのキャンドルくれたり、風邪引いたら、これが一番効くから
！つて薬持つて来てくれたり。ゆみの、さりげない優しさが好きだ
よ。

ゆみは、恥ずかしがり屋だから、好きとか、あの告白以来、言つて
くれないけど、俺は、好きだぜ！

これから、俺は大学生になつて、忙しくなつて、今よりもっと会え
なくなるけど、ゆみの事、大事にするし、好きだから！だから、ゆ
みも、俺を忘れないで！つて言つたら、縛り付けてしまうよなー。
だから、言わないでおく。でも、好きな人が出来たら言えよー。

俺、近くにいてあげれないから、ゆみに寂しい思いさせてしまつだ
らう。

でも、やつぱり寂しいなー！

1人で卒業したくないなー。お願ひ、一緒に卒業しよう？（笑）無
理だよなー！俺が、あと一年遅く産まれれば、つて最近、よく思つ
てる。でも、ゆみがいるから頑張るよー。

じゃ、先に行くぜ！

優

「

涙が止まらなかつた。
声を出してないた。

優先輩！

最後まで、名前呼べなかつた。

「もう彼氏なんだから、先輩って呼ぶな」って言つてたけど、優、って呼ぶのが恥ずかしくて、何か用がある時は、

優先輩の近くまで行って、トントン、って肩叩いて呼んでた。

私、最後まで・・・。

ゆみを一番に乗せたいから、って買つたばかりの車、私と会えるまで、誰も乗せなかつたんだよーって言つてたね。

私の部活が忙しくて、

一緒に帰ろう、って言われてたのに、帰れなかつた事多かつた。いっぱいいっぱい、寂しい思いさせてたよね。

優ー・・・

ごめんなさい。

優の葬式が終わつてからも、私は部屋から出なかつた。

友達が、新しい学年のクラスを教えてくれたり、「明日、一緒にいこう!」って誘ってくれてたけど、前を向く事が出来なかつた。

死のうと思つた。

でも、いつか優が
ひょっこり現れるんじゃないかと考えると死ねなかつた。

優の死を受け入れたくなかった。

ある時、

先生から電話が

かかって来て、

出席日数がギリギリだと言つ事を遠まわしに言われた。

それ程、沢山、休んでいた。

そして、仕方なく学校へ再び通い始めた。

毎日を、ただ流れるよひに過ぎじて、

私は卒業した。

優が、行きたがっていた大学。優の代わりに受験した。

私は大学生と言つ道を選んだ。

そして、
4月になつた。

そして、優の代わりに学生になった。

優の死を

受け止める事は、まだ出来ていない。

優が、

18年間生きて来た事、私の彼氏だった事、この世に存在していた事、絶対に忘れないから。

「じゃ、先に行くなー！」

優は、そう言った。

優は、きっと
このどこかにいて、

「引退とか卒業とか、いつも、俺ばかりが先だよなー！」って不満

そうに言つてたから、
実は、大学に行つてて、私に見つからぬよ
うに隠れてるんだ
よね！

優、サプライズ好きだもんね！

いつか、優を見つけた時、私は言つよ。

「優、サプライズし過ぎーー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1129e/>

贈る唄

2010年11月24日01時46分発行